

文部科学省補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）」

2019年度 連携型共同研究 成果報告書

研究課題名	『美の力、芸術の力によって、人を元気にする』実践と研究 — 鑑賞における技能とは —
研究代表者	青木 宏子（大阪教育大学 教育学部教員養成課程美術教育講座 特任准教授）
共同研究者	渡邊 美香（大阪教育大学 教育学部教員養成課程美術教育講座 准教授） 高橋 暁生（積水ハウス株式会社 CRS部 絹谷幸二 天空美術館 研究員）

研究成果

研究の目的

本研究は、美の力・芸術力を通して、人と作品、作品を前にした人と人のコミュニケーションの方法について研究を行ったものである。

美術教育における鑑賞は、豊かな感性を養う学習活動である。このような鑑賞活動において、美術作品がもつ力を受感するという事は、一人ひとりが主体的に鑑賞する＝作品に関わる能力を発揮することである。しかし、作品を見慣れない人にとって作品を前にした時に何を見、何を感じるのかが分からない、作品を見ることの意味が分からないということも多くある。本研究では、作品から得られた情報を鑑賞者自身の記憶や思いと照合せながら味わい発見を楽しむために必要な、作品に対する問いかけ、語りかけ＝「鑑賞における技能」を習得、検証することを目的とした。まず本技能を浮かび上がらせることで鑑賞学習に対する分かりにくさの解消、一人ひとりの感性に応じた鑑賞指導のあり方を提案し、加えて異文化交流の中で芸術作品を用いたコミュニケーションの方法を検討するために、積水ハウス株式会社が芸術文化発信の拠点として開設した「絹谷幸二 天空美術館」の作品・文化資料と大阪教育大学美術教育講座で培ってきた教育研究方法を互いに活用し、社会に開かれた教育における美術鑑賞活動の研究を進めた。

～小学校学習指導要領との関連性～

学習指導要領には、「社会に開かれた教育課程」という理念のもと、地域の資源を活用し、地域と連携した教育活動が求められており、小学校図画工作科・中学校美術科においては、地域の美術館等と連携することが推奨され、図画工作科では「生活や社会の中の形や色などと豊かにかかわる資質・能力を育むこと」、美術科では「生活や社会の中の美術や美術文化と豊かにかかわる資質能力」を育むことを教科の目指すところとしている。『小学校学習指導要領』第2章第7節 図画工作では、小学校3・4年生の鑑賞の活動について「身近にある作品などを鑑賞する活動を通して、自分たちの作品や身近な美術作品、製作の過程などの造形的なよさや面白さ、表現したいこと、いろいろな表し方などについて、感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を広げること。」と表記され、また、指導計画の作成と内容の取扱い（8）では、「各学年の『B 鑑賞』の指導に当たっては、児童や学校の実態に応じて、地域の美術館などを利用したり、連携を図ったりすること」という表記があり、思考力、判断力、表現力等を育成する観点から、児童の発達の特性を踏まえながら「感じたことや思ったこと、考えたことなどを、話したり聞いたり話し合ったりする、言葉で整理するなどの言語活動を充実すること」が求められている。

よって、本研究では、学校教育の現場と美術館での鑑賞をつなぎ、美術館の資源を活用する手立てとなるよう、特に、社会科見学などで美術館を訪問する機会のある小学校中学年を対象に鑑賞教育の教材開発を試みた。特に小学校中学年は、言語能力（論理的思考）が発達し、集団活動に主体的に取り組む年齢であるため、友達同士で話し合う、対話の中から互いのよさを見つけるなど、鑑賞活動を通して「児童の人間形成をはかる」という学校教育の目的に適う教材となるよう開発に取り組んだ。

研究内容

本研究では、美術作品に対する問いかけ、語りかけの能力としての「鑑賞における技能」の習得を検証することを目的とし、以下の①～③の調査・実践・分析・検証を行った。

① 対話型鑑賞法やスライド鑑賞教材等の問いかけの事例を収集し、美術作品を前に鑑賞者が主体的に感じ、考えるための「問い」を、鑑賞者の思考のマッピングからパターン化し蓄積する。

② ①のデータを基に、美術館展示作品に応じた思考を促す「問い」を記載した鑑賞実践のための鑑賞ワークシートを作成、また物理的意図から細部をじっくり見るためのツールとして木を素材にした「鑑賞ルーペ」も作成し、海外の人たちと日本の学生とがワークシートをもとに鑑賞し対話を行う。鑑賞の様子をビデオカメラに記録し、「作品を見る視点に広がりが生じる」、「他者の感性を認め合う」などの思考がみられたかを発話分析より検証する。また、作品の鑑賞を海外の人たちと実施することにより、グローバル社会における多種多様な人々、見方の違いや、日本の地域文化などへの理解も深め、美術作品の印象や作品を見る視点（材料、製作者、時代背景など）を交流し、鑑賞におけるツールとしての言葉の役割と、言葉以外での鑑賞の技能の働きについても調査する。

③ 鑑賞における問いかけの方法を検討するため、作品分析に関する専門知識の提供として、絹谷香菜子氏（作家：絹谷幸二氏のご息女）を招き、鑑賞作品に用いられている材料についての解説と質疑対談を企画。作家の作品に対する考え方と作品との関係からワークシートを再検討し、美術作品を人々と鑑賞し対話する場を設ける。また同時に、一部の鑑賞予定者も企画対談に参加し、鑑賞体験の事前に材料などの基本情報を与えることで、作品を見る際に自分で問いかけができる視点を養うことができているかなど、対話を分析し鑑賞における技能を検証する。

①～③での鑑賞実践は、「1）ワークシートを使う、2）事前に視点を養う、3）見るためのツールを使う」という点に重点を置き、共同研究者の所属先の「絹谷幸二 天空美術館」にて、鑑賞者を変えて研究の前半と半ばの2回に分けて行った。

「1）ワークシートを使う」では、本大学の学生たちと海外研修のために来学していた現場教員や教員養成系大学の教授が共に、②で選出した19個の問いかけに思考を促されながら、作品を各々が選んで、ワークシートに返答。その後、これを基に日本語と外国語を交えて鑑賞後の対話を行った。活動後、ワークシートの返答内容の統計を出し分析を行った。

「2）事前に視点を養う」では、鑑賞実践のための学生を対象にした事前授業も兼ねて、作品分析に関する専門知識の提供を本学に絹谷香菜子氏を講師に招いて行われた。画材の顔料の解説時に、絹谷幸二氏の作品によく使用されている「金箔」について取り上げたところ、その後の美術館で鑑賞者である学生が記入したワークシートには、この事前授業の成果として、「金色」ではなく「金箔」という言葉が多用されているのが見られた。

「3）見るためのツールを使う」は、鑑賞実践の際に、木を素材にして学生たちが思い思いの形で制作した「虫眼鏡の枠」のようなツール「鑑賞ルーペ」を用い、ツール使用時と不使用時の「見え方」についてレポートし、それにより、このツールが有効か否かを検証した。また、ここでの鑑賞者の学生たちは、事後授業の活動として、美術館で鑑賞を行う前に「作品に対する問いかけ」や「自分から作品に問いかける」ことができるようになるには、どのような事前授業が有効的かを考えてパネルを作成したが、ここにも鑑賞ルーペが登場しており、学生たちの「鑑賞を手助けする道具」への興味・関心が見られた。

これらの鑑賞における技能についての分析結果の内容をもとに、本研究の成果として、鑑賞教育の現場で使用できる「鑑賞時に使用するワークシート」、鑑賞を手助けするツールとして「鑑賞ルーペ」を考案した。

大阪教育大学美術教育講座から美術の鑑賞教育における「事前授業・美術館での鑑賞・事後授業・発展学習」などのノウハウを提案したファイル冊子「アートとともだち」を作成。美術館での鑑賞学習の方法に対して不安や苦手意識のある教師にも用途に応じて活用してもらうことができるよう、本学美術教育講座のHPにも本教材をUPした。

・大阪教育大学／美術・書道教育コース／地域・社会活動／教材／『アートとともだち』美術館訪問鑑賞活動を支援する教材 [https://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~bi\\_jutsu/menu3\\_3.html](https://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~bi_jutsu/menu3_3.html)

